



長



諸國里人談卷之四
七水邊の部

○ 水の韓
○ 塩の井
○ 油の池
○ 握の兼井
○ 念佛池
○ 嶋の旋
○ 裏見の瀧
○ 有馬の毒水
○ 櫻池の遠江

陸奥 出羽 武藏 美濃 西国 下野 拱津
○ 龍池の相模

○ 若の狹井
○ 塩の泉
○ 油の泉
○ 入の梅井
○ 浮島
○ 津志の滝
○ 鼓の滝
○ 高野の毒水
○ 竜の穴
奈良 下野 美濃 拱津 出羽 安藝 拱津 紀伊 信濃

八 生 植 部

- 曾根松 播磨
- 十六桜 伊予
- 唐倚松 血江
- 枝分地 安藝
- 青葉楓 相模
- 観音寺笹 三河
- 臥竜梅 武藏
- 遊行柳 上野
- 伐レ桜 京
- 大番焦 堺
- 八幡木 荏
- 小所若菜 出羽
- 大樹 徳島
- 八橋杜若 三河
- 不斬桜 伊勢
- 八重桜 大和
- 銭掛松 伊勢
- 五法櫃 甲斐
- 印杉 大和
- 大月杉 駿河
- 西行桜 山城
- 一夜杉 出羽
- 物見松 美濃
- 山城野萩 陸奥

諸國里人談卷之四

菊岡采山翁著

七 水 邊 部

○ 水 辨

水の坎の象なり其文横いよる時則三と記從いよる時
 則出と記其懸、絶隄其用、純陽上、時ハ雨露霜雪
 たり下、時ハ海河泉井たり流止寒温ハ氣の鍾、而既異し
 其流鹹苦ハ味の入不同、くくハ水の萬化の源なり、其方物
 の母たり、飲ハ水ハ資食ハ土ヲ資、飲食ハ人の命脉なり、本州
 水ハ火より柔、くくハ水の患ハ火より慘、くくハ火ハ避、くくハ水ハ
 避、くくハ火ハ撲滅、くくハ水ハ如何とす、事ナク男女
 激陽の氣性、然なり、○茶經云山水と上、くくハ江水、くくハ江に亞く

井の水下と下略 ○谷響集云汝を盆に又盆小あり
漆満る子溢に汝水同知しておなましくお礙に復塩一井を
此一井の水に和らふ其水増さじ

○若狭井

南都東大寺二月堂の若狭井の若に水なり毎年二月
朔日より十四日毎に法會あり下時寺僧加持し井に心
を狭くく三遍魚を則水漏せしげ水と云を指
牛王を押事恒例かりんげ目若狭四鷲の衆の淵の
水濁し乞おまふ明神より進せしむるのふくと云物の
淡い遠安郡の心の禁にある川の流し

遠敷明神の糸神 上宮彦次、上真尊、下宮豊玉姫なり

往昔國主あまをうごころ其多々の淵に藤と荷とあり

その日二月堂の井に藤多に実りしよりよきことなり

二月堂の月素院と云本堂十一面觀音長七寸の御佛し
彌波の浦より出祝秘佛の像し牛王の像は弘法大師の化

○塩井

陰奥國會津若松より糸波への性遠六十里越とらふ心の
禁に大地とらひ深ありし若松より五里余け而所の川若ま
瀬の泉大小二三あり大木を刻て度おき桶のふとくけりて
その泉をかくし本年來降る朽く岩のまじりけ湖とほそ
地多くし民屋七八十軒居地を焚て産とらげりし海
島之四日路より進せり如く唐雲南省四川浦よりあり塩

井も是し○夏は湖と浴て乾し熱病より塩のまほしく
焼る塩のまほしく又浴衣を拭きおぼしくと塩のまほしく

○塩泉

下野國日光山の北七八里にあり栗山と云温泉ありけ水のふり
少の洞ありけ瀧り漱水し焼くしてその傍に舎ありて字其
焼くる塩のまほしく弘法大師の加持ありて云くは此の湯の
山中にあり湯多し四日流すと云くは本教の薬しきましく
は温泉の法の痔の病いと治す事神薬なり

○油ヶ池

越後國村上の辺にあり中黒川村 高田にあり方十間余の池あり
水より油なる土人昔を束て水をかき攪りて穢を去る

油と云くはそれを煮てて灯の油と云くは自ら臭くして
臭水油と云○天智帝御宇に越州巖可代油薪之水土
とあり則ち是し又薪より出る土あり方一尺をく平の尾行
切月にはしめて薪と云 或人越後よりけ土を得てお相と云
○又土中より掘出まて薪の伴に近江にはありありわたり
わたり木の朽ちるものく二二入ほりありて掘出り数日乾
水氣なくする時焚きし上取の炭より炭しきと云

○油泉

英法國谷汲の所基豊然上人延暦年中奉割の時その
地と平地あり一つの巖と数層を石中より油涌出たり
其を掘りて日我は地よかひて大衆の信と云

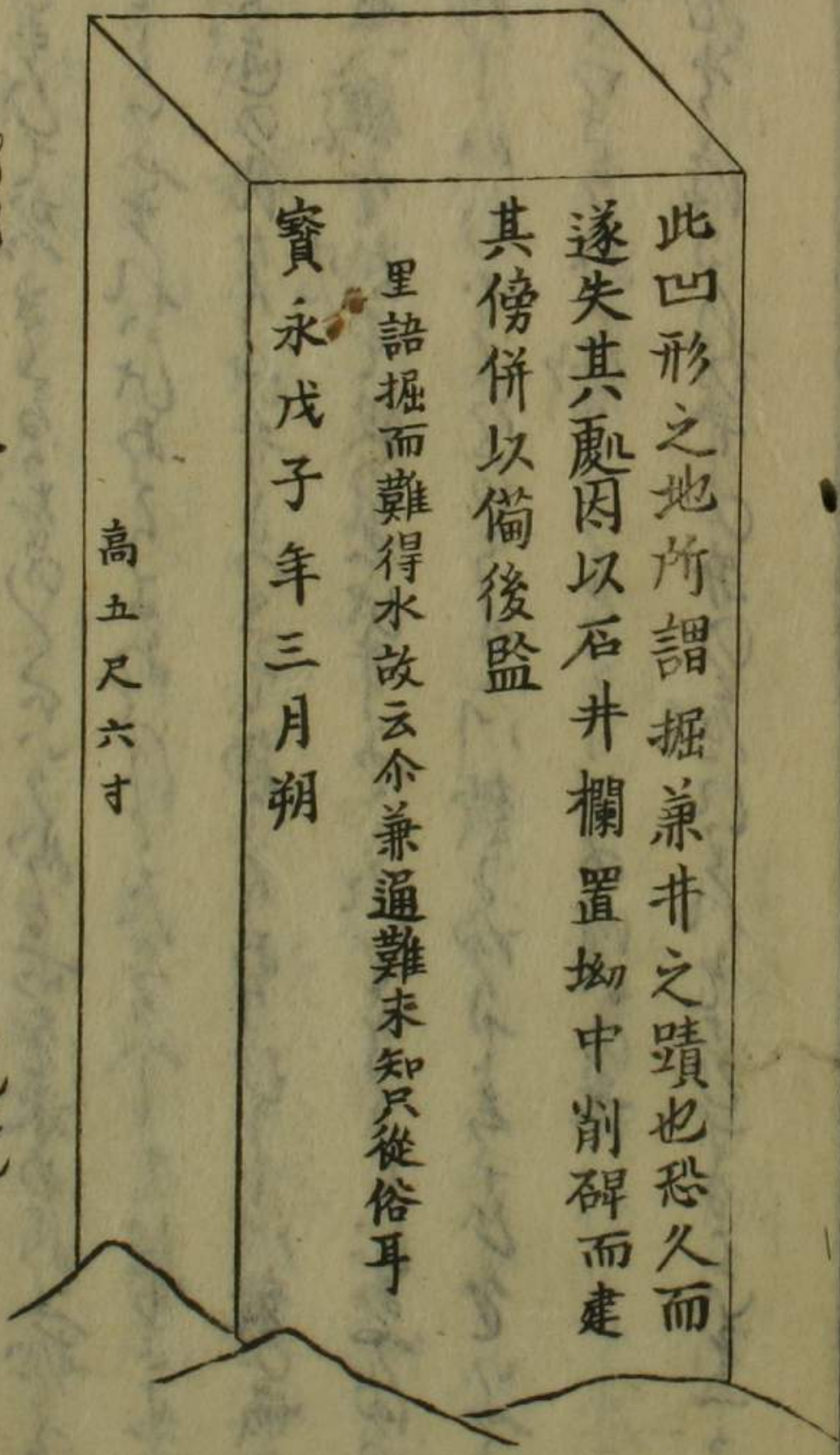
廣く利益せしむるに油すましく多しんものなりといひ
おろく則油漏るる事衆のあしき事歟大よあるらひ
十一面觀音を安せしむる其長五尺の像しを後延在の
帝その像をききしむる額と華嚴寺と賜す油漬く
後一ききしむる事歟の常焼と焼をほくふあり

○ 狹並井

武藏國入間郡 狹並井村小ききふに淺間宮の棟にせり
窟あり本掘り更の井の深なり方六尺とりの石を築いて井
掘りし井の埋りて谷ひりり傍に碑ありちうたに云川越
るものぬのあしきを建しし 川越より二里未申方
千載 此の井もあつたをうもくまよあつたなり

此凹形之地所謂掘兼井之蹟也恐久而
遂失其趣因以石井欄置坳中削碑而建
其傍併以備後監

里語掘而難得水故云介兼通難未知只從俗耳
寶永戊子年三月朔



高五尺六寸

けあつりよ掘兼井と稱する所ありけしを淺間掘兼といふし
是より五六町方に二十間とりのかき堀のあしき窟あり本掘り其
井の深しと云又し女部田或入曾里行もありあつてけし土地
高くして水を得るよゆて掘りぬるるとりし里語ありて

を遠くしむし掘金の名水なりと喚令井といふを眞の字派
書しりしものも其のなり○享保九辰の夏三編と増上寺の
塔中法光院昌泉院の遺蹟にむしりて此に傳説し掘金の井と
掘るに事なきとてさうおろし飛脚やとておろし曾文公を
杖よびまひてかきさるるをめぐらぬるを求め給ふ掘金の井
をくそとておろしおろしおろしたててくそとておろし
くそ実迹の地なり井よりそおろしおろし川越の城より
豫金名へ難を扱ふ彼の井より水とてくそにあらぬく
は井底へぬりおろしおろし川越よりてくそをくそ増
きとのくそとておろしおろしその時の若
武蔵守はほりぬの井の底にこれをおろしおろし

と伝へしむしりてくそとておろしおろし川越の城より
豫金名へ難を扱ふ彼の井より水とてくそにあらぬく
は井底へぬりおろしおろし川越よりてくそをくそ増
きとのくそとておろしおろしその時の若
武蔵守はほりぬの井の底にこれをおろしおろし

○入梅井

按津國矢野郡丹生庄原野村栗花落左馬平一里内に
井あり深く三尺深一尺とあり四角の石帯い水取入

入く水漏のつるし入梅の立春の後凡百三十廿日になる
は假柘榴花のりめて用ひ粟花徐落の本草梅黄の流
を八入梅の字と用ひては左馬始祖の真勝と云ふ横佩太史の
聳に累代久しき家し豊成の娘白玉姫の中將姫の
姉中其のあつは池におひて薨と云ふと細之宗の祠
をてて、韓大天子の祭りし其池よつて水漏が今に津夏
の假を云ふ

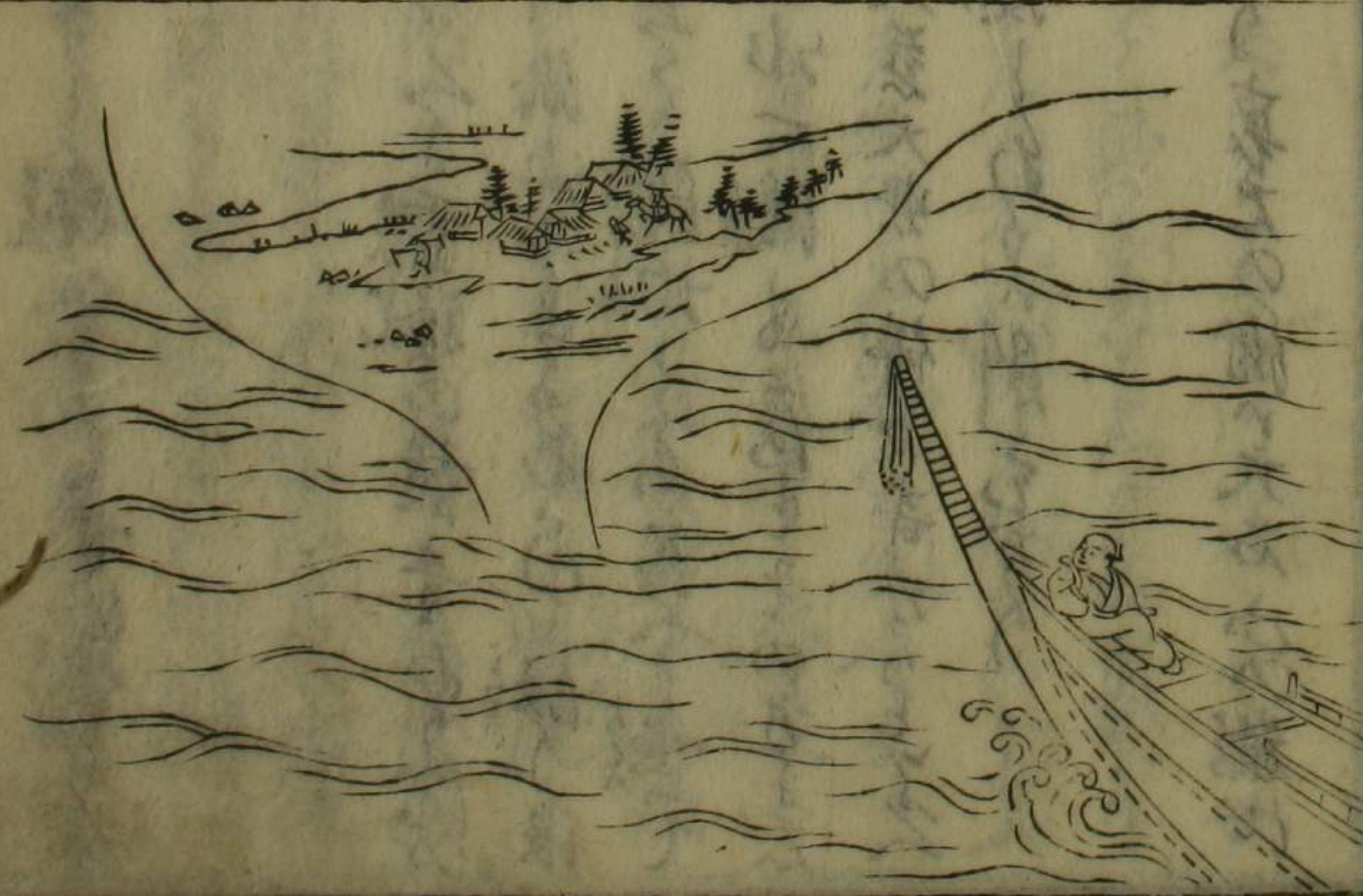
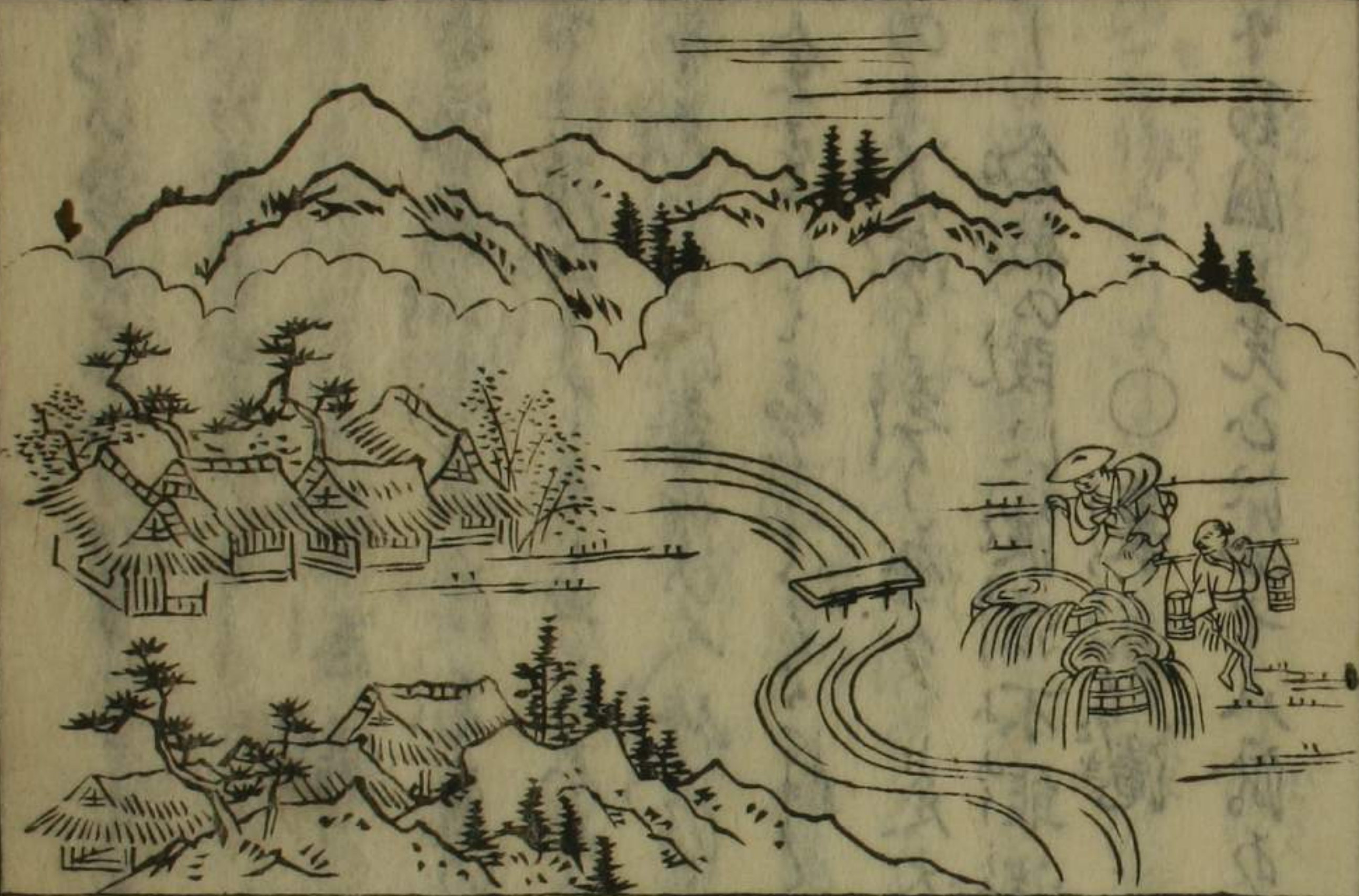
念佛池

美濃國谷汲と坂下の名に小き池あり汲せる稻を念
佛稻と云ふ池の中に石燈あり誰人のまゐるといふを云ふは
佳來の人稻のうけでる燈をびうかを佛と云ふ水田の

とく滞りく水漏多しに池がらてあしきう子念仏を
とまらう池を責念佛をりておのれに燈をてその池を立
かりと云ふを念佛池と云ふ

浮嶋

出羽國最上郡羽黒の林依澤に大沼と云ふあり池に
大小六十六の浮嶋あり深さ四尺より一丈二三尺あるをのく國
のあつと云ふを浮嶋と云ふ池をて大さ池と云ふと奥列
と云ふあつなり池のまじりに藪多しうき池に葎草生る
あつを芦原池と云ふと六十余の池く常の汀に所あり
池を割てわり松栢あり松栢を山崎と云ふと云ふ
秋のちし日毎に浮嶋を流るゆきと云ふてありと云ふ



けものり時くして二十嶋三十嶋もろくも巡りし春妻の此の原
 原の吹はくしあつきの水も映して海是斜なり此の島く
 汗もある時人づつる島に霞き動きと出く出ざる島を押開く
 歩り歩り奇し折敷の人あつてその志雨の島をきりし
 縦河を考へ吉山此の島ありあり

○ 嶋遊

西國の海上に廻航は沖掛として沖中に磯とありし時
 事あり深文よおのんで居てきたる一の嶋出来し樹木茂り
 立津くまのりよふ人あつていりし商人の物賣り沖中を警備
 とく事ありのりいり放ちて居る形やあつたとくしは
 こと島にゆく島にゆく島系しきまに居る島ありし時

清の勢ひとてしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
とてふれひかろく

○津志港

安藝國山縣郡津志港のくろく靈験の觀音あり所の
下に潜るくろくしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
をたもるくろくしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
念ぶくろくしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
念彼の段に波浪不能没とありは則乞なり

○裏見滝

中野國日光に四十八滝あり裏見の滝は大石の崖に

出て岩窟あり高一丈あまり深二丈七寸三塗川の壘とて老女
の石像ありまじしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
上よる像の不動明王ありまじしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
事多し不津の人茲はまじしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃

○鼓龍 蜘蛛滝 有明様 屏風岩 三塚清水

振津國有馬郡陽本の南八所なるにあり水のなるまじしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
の勢ひ似たりまじしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
の余り勢の強しき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
傍に有明様とてまじしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
大陣をたもるくろくしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃
○三塚清水とてまじしき事多くしき一掃のまじし業に塵氣掃

○有馬毒水

湯本の南五所より池ありは毒あり印の率如婆あり然る
ありと飲之則死ス多虫は如水鱒も又死す川て多の池獄
虫の池獄と云ふ今ては谷と地獄谷と云ふ

○高野毒水

紀州高野の上玉川と云ありは水も毒あり傍に碑ひあり
こまねもはやし人諸人のち池の奥の川ひのあり

○檜池

此のありやりのあり
信後阿曇皇祖の源空上人の原は比叡にありその頃の
吹返一山の雄才なりやるを園日長壽の蛇身に志る音龍を
なりし海勤の出世を傳へし遠別檜池は其の原と云ふ

あまのつゆんと池の池の水と物と其時池水大なる
を園入寂と同時に今に至りて困倦なり鈴ヶ池の池の
いきも申す云りは池は遠に園笠原庄探村に池ありて
方五間より池ニツわり檜池と云池の社ハ牛頭天王なり
毎年八月彼岸の中日午の刻に半切桶に赤飯と壺りて水練
の遠者なるものあまを押し池の志すとおとふ西を押し
其よりあまの存に際してはくして于時池水溜巻てその飯
水も流びしは飯煮その飯煮にきくひ三ツ七ツ或
五ツ年々に増成あり

○龍池

相列の海蔵のひりの方に池あり海蔵なる也

浪がんのかや入してそのの扁はげ本并天少現而之
○はたの成に福をいふありはるの著るは徳ありはる自らを
指へるもの福と云ふは又徳を徳とあり飛ぶ如し

○乾穴

伝列 新羅郡の中 徳と云ふは里の宮なる神の徳下
に本なる穴あり其深は梓川の深さより深くとも大に流れる
は川水流くはや入る未づごとくはるやと云ふは
里徳云 由世徳君のものありてその奥をたうたんと雄大
をひく水の洞なる時はや入る九三町ともなりはるに
去るより子産と云ふはもきて松木と削しとる何と云ふ
怖しかりをれと云ふらめはまゆりやうし

八 生植部

○曾根松

播磨国 印南郡 曾根村 あり 天属 天神 本なる
お竹の菅公 海蔵 筑紫 筑紫 筑紫 筑紫 筑紫 筑紫
小松を植む 非正 築松を植む 筑紫 筑紫 筑紫 筑紫
ゆゑて 今 枝葉 束一 の 名 本 なる

高一丈三尺 周リ一丈八尺 乾より巽(指)七丈
乾より坤(指)十一丈 這枝毎に枝よは其數百寸分

○不揃梅

伴勢 白子の 寺村 観音 寺の 堂の 前の一木の 様あり
に花開く 葉の 花の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の 葉の



花寺の池邊尚寺の子女觀音と稱し、靈驗世々有
りたるは沙龍を産み、而して毎歳ももて、赤んぼなり、む
は寺村一つり、ある女五月節をせらるる年、むしう、今
も、心でかり、

○十六橋

伊予國和氣山越村、恩寺の林の中に、一本の松あり、わ
り、毎年正月十六日に、花候、よみて、は、あ、り、び、う、尚、寺、の
僧、實、り、は、橋、を、う、て、我、子、橋、を、築、き、り、老、衰、に
及、び、病、少、非、に、お、し、け、と、船、を、入、り、る、を、い、存、令、う、り
と、あ、り、び、う、び、て、船、渡、を、舟、と、り、れ、と、その、船、を、船、と、り、
う、り、寺、に、正月十六日、し、それ、う、り、し、て、は、日、花、候、と、し、

○八重橋

南都東園堂の、市、の、中、の、八、重、橋、に、わ、り、一、條、院
の、池、上、東、門、院、に、さ、く、と、橋、庭、に、後、に、教、師、の、令、を、
與、福、寺、の、列、爲、に、命、し、け、り、剛、令、の、意、を、志、す、と、
る、所、に、あ、り、を、い、り、は、橋、に、我、寺、の、聖、あり、何、れ、他、の、聖、ん
と、し、海、邊、の、内、に、も、右、の、事、と、さ、し、り、わ、り、海、邊、の、事、に、
い、り、わ、り、その、か、を、む、し、に、死、と、志、す、と、い、り、し、一、條、院、の
衆、に、と、感、し、け、り、ひ、今、う、り、は、橋、を、築、き、り、我、橋、と、稱、し、
且、後、世、に、あ、り、る、を、他、の、事、と、さ、し、り、わ、り、一、條、院、の
宗、師、の、意、を、傳、へ、り、と、年、毎、の、死、の、時、に、橋、を、と、り、て、は、死、を
や、り、し、む、し、う、り、と、さ、し、り、わ、り、市、野、村、に、花、橋、庄、と、號、し、け、り、

と後ふびさくつと平毎樹よふ 萩もさけること

○唐倚松

近江國志賀郡唐崎の松一莖一葉しんまふこと名あそ
せよなる可なり 後水尾院けあめなるをよるせは
後心人の志かしく死んて我乃かえをせむらう海
志を満る三井寺と坂中のるし唐崎花園里もお列

○浅掛松

勢列 窪田と操のるを四野にありお侍むらう 春ま
人け野のまきよ供ては杉系に行程のわあつとさ里た
ひして十日の冬雪七日の長野の杉系といふに松
文の縁をけねえよかけて旅うり太神宮と深し由一ゆらる

他の人彼縁をんま 蛇の蟠らるまよかてあてを命
彼よの故つへゆらう後わらむらる事まきくそ口行とまひ
又春まらうとまきをんまかけら縁そのゆらうとあり
あつらふらふてはあわらうと云り

○枝分桃

安藤園新庄村と佐東村の界に大なる桃一樹あり
あつらふらふに佐東をうりけ桃佐東のまらうと云ら枝の
桃のまらう新庄のまらうと云ら枝の其まらうと云ら
弘法大師佐東を桃をを給ふに桃の甚まらうと云ら
うらまらうと云ら新庄をを給ふと云ら其まらう
と云らまらうと云ら故に一本に取寄の味がわらうと云

○ 江流榎

甲斐國二宮の社地に大本の榎あり流の皮のうへに付て仁は
流なくぬらうく白くけ榎と他も栽り善くはくし

○ 青葉榎

武藏國金沢禰名寺の堂に一木の榎あり名を青葉榎
いひてはくしとやのうらぬんふまきうらぬる榎とを
いひてはくしとやのうらぬんふまきうらぬる榎とを

- 新溜 西湖梅 黒梅 桜梅 文殊梅
- 香賢象榎 蛇混拍 一ッ松 青葉榎等し

○ 印松

和列三輪の印松とらなり相傳存舞國奄藝郡那流人

異如の産て一子と然く後母子ともなり方去りて

意ししるるてもたよつる和の心とて松とくも門
は秋とゆへらまはし津春のりくまをを求めて三人同く
神とあるあ社の各も辨列奄藝郡の人ありてやとて
いひ傳へしと云り又日本記旧事記ホの流あり

○ 觀音寺榎

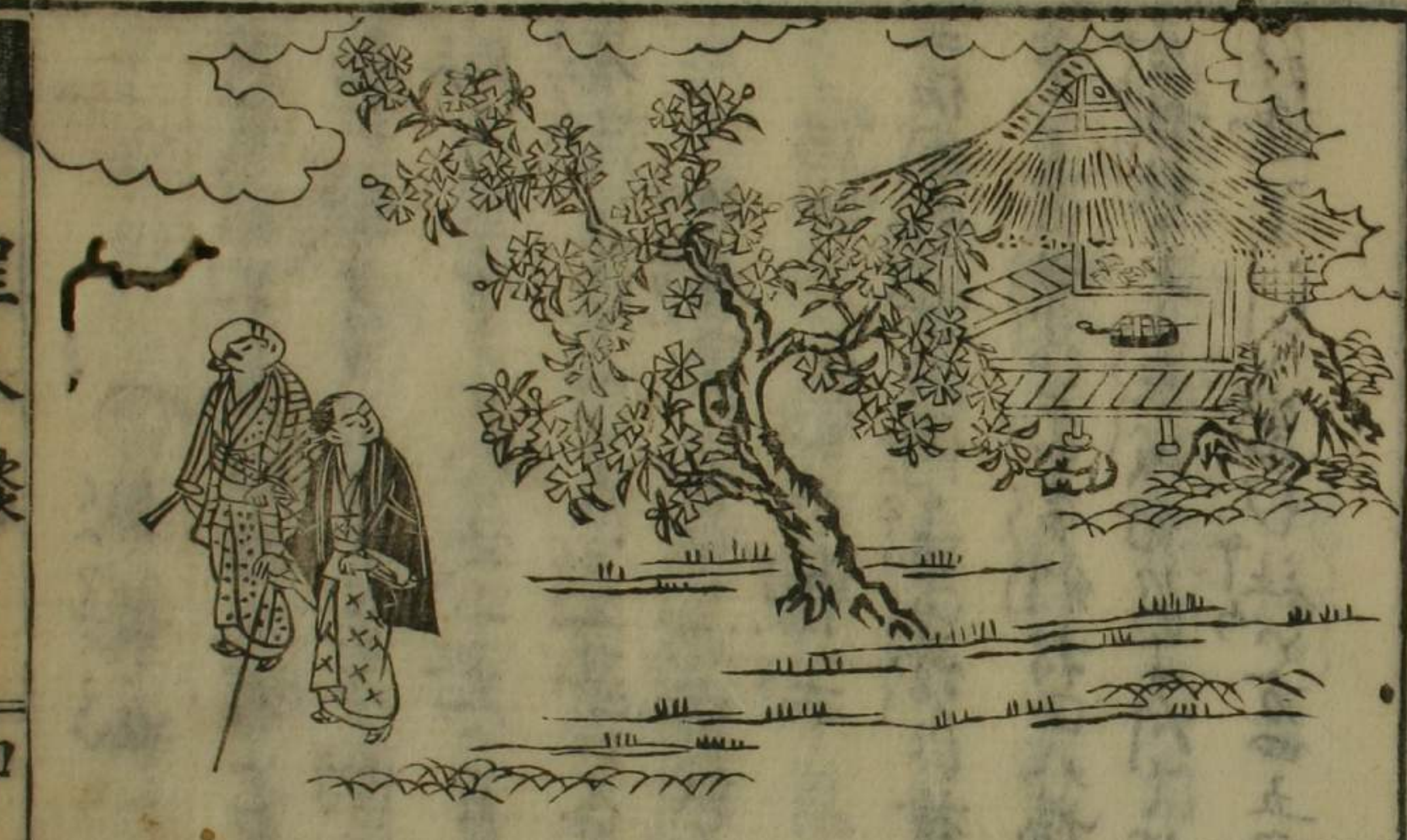
三河國保飯郡小松原觀音寺の本より馬頭觀音あり
沂基菩薩の作し毎年二月初午に比ゆふ令春作の人
隈並と傳くゆめし馬の形を付沙粒と鹿の呈しホの産と
何れも忽念あり奇し又觀音を流るぬは堂の常とる
時帆とてさうとて敷て張ありよんてとるぬはもは帆とす

○大竹

後河國府中の寺に元禄年中の隙一夜の中を假ふの
 ありし地凸いなりありあやしくとんるよ一お月うらしく筆
 生ゆらり迎候よ敷たう一美かりの日と追て願長一竹よ
 たりとらるる目通しめく九三人周りあり未開のまなりと病人
 尺物と一羊汁番元尺物と身う産具のやうに下望ありしに
 住僧の云ふ所詮け竹ありて人う一海一寺のまのうやんと
 びりよ候たりくおをを配分しと物さひくぬ笠物に掛
 せり丸盆たきこ盆樽なごひしと物と尺成人飯住子に
 けり人お多しと産なりとせしし其意と考るる
 人の強し其大さ徑九寸ありし

西行撰

道なき柳



なうして舟なりき西任の事をえて患思し〜
及念ら所西の事を製〜金都とつら〜
〜なる事と有る何をもさ〜
〜付の〜して西任を〜
ひた〜

○西行柳

下野国芦野あり具州ノ界柳の〜
さり信の社あり温泉大明神〜
乃の河の傍〜
は柳〜
柳の松聖益り上人〜

○小町芍薬

出羽国雄勝郡陰内湯沢〜
は柳〜
小町の〜
〜女子〜
〜又田畑の〜
十九株あり小町の樹〜
〜他〜
〜

私云
 九十九のうらやまのふしにひい深草のやねごと
 一よりえ世にひつらんり又もこをいせし
 けりまこのあらうふねまふ所のまのやうに
 信物よかりくふ所のまのあけのちのま九十九
 けりまのまのふらぬきまのまのまのまのま
 九十九のまのまのまのまのまのまのま

○一夜拾

河内河内陸奥より書きつりて南子枝のまをありて輪
 の神の中一ありけの枝一本拾うてとてつて
 九一十本やの枝。梢切らうてるまのまのまのま
 枝をばまのまのまのまのまのまのま

○伐極

京都東福寺の北殿司の名画つらぬ軍義持公の
 時、北の一日兆の志と謂くぬ望ひぬを則達せん
 唯兆の目賊賢官爵えらうせたり一紙一筆
 りてまのまのまのまのまのまのまのまのま
 と裁のまのまのまのまのまのまのまのまのま
 樹のまのまのまのまのまのまのまのまのま
 伐んとして裁指ふ大まのまのまのまのまのま
 伐りて今にむて奪中に極ぬ

○大樹

皇承天皇十八年の筑紫の道の後の風よありて倒

まゝなる木あり長九百七十丈百石その樹と治る性多し天を向
て云是傳の本そ一の老木ありて曰け樹に撫し昔倒る
のこら旭の暉にわらうてい剣指島を照し夕日の可なり
あふてい阿蘇の心をかろしき 日本記

○又云昔近江國栗本郡に大なる松の木あり其圍五百
歩あり枝葉繁茂て其木の乳朝よ丹波にさし夕よ
伊勢國にさしされて滋賀栗本甲賀三郡に産を産
日乳あつてさして田畑の作物養ふる百姓もこは歎ては由
と委にふて掃守松の命しとて松成しむ 後志

○物見松

此松は垂井の古松の石もせふに松板の如しの松

此の松他ふむし一松板けたのうを隔りて性来の人をくくむ
けりし一松板の越後國関川と小田切との間に松板村と
りあつて下の出生なりと云

○妙因寺の蕪鉄

泉列堺妙因寺に番魚の大樹あり高一丈三尺叢生
りて十三本圍り株二丈比類なき樹としる後筑
ふにあり多しあゆむと子樹とて守りて守りて守りて守りて
まゝの田舎にこれなりと守りて何と守りて守りて守りて
教示教示と扱ふに守りて守りて守りて守りて

○八橋杜若

三河國不破郡八橋山に聖徳太子の杜若の世にあり



なりけ杖ふるい山籠りして燈籠の燈の影をたたくと水たりの跡は
 とくひ僻事し標は流の事にはわら花影のふし

○文殊野萩

奥列文殊野の萩は本萩より灌木のふしと強帯のふし萩
 との萩にしてらやとよ作る本とし又申わら本萩といふ萩に
 まる萩等してその萩はなるといふ本のわらわらうと云ふはし
 多過ぎく申わら本萩をわらうと云ふまんとて長をうたふや
 ひりしたけなす仲とらふ人みらのくの後なりあるはたけなすと云ふはし
 けり何多過ぎの萩を長摺十二合に今入のち登りけしと
 京入の目二條ちぬよ人わらわらあまら車あはるまるととて
 里人談四之終

